秀賞

私の舞台

宮城県気仙沼市立唐桑中学校
３年　吉田　美咲

未来の私は、どんな自分になっているだろうか。そして、今の私を振り返った時に、どう見えるのだろうか。未来の私へ、今の私が感じる思いを伝えたい。もがいて、這い上がった先に、そこから見えた景色がどんなに輝いていたかを伝えたい。

あの日、私は、まるで噛み合っていなかった歯車が動き出したような感覚を味わったのだ。

今年の３月、気仙沼市民会館にて気仙沼バレエ団の舞台公演が開かれた。演目は、ドリーブ作曲「コッペリア（全幕）」その客席に、私は居た。

「なんて美しいのだろう。」

私の心が震えた。かつての仲間たちの堂々たる舞台。まるで魔法でもかけられたかのように指先までしなやかに、それは本当に美しく、細部にまで美が宿っているかのような美しさに、息をのんだ。実は、私も３年前まで、この舞台に立っていた一人だった。５歳から７年間、私も皆と同じようにバーレッスンを受け、淡いピンク色のトーシューズのリボンを大切に巻いていた一人。舞台上で繰り広げられる輝きに満ちた世界が、なんだかだんだん眩しくなり、私は次第にうつむいていった。この輝きは、今の自分には、もうないのだろうかと……。

長引くコロナ禍、学校生活の中での自由や、行事全てに制限が付き、灰色の時間だけが過ぎていった。その中でも、卓球の部活をしている時間が何より自分らしくいられる時間。それでも何週間も練習ができない、対外試合も中止、部員も全員揃わない。私は、部長としての自分の役割や存在価値が見えなくなり、息が詰まった。自分の心がどんどんグチャグチャになっていくのが怖くてしかたがなかった。学校へ行くことすら、行くか行かないか迷う自分になっていた。そんな時に観たのが、この舞台公演だった。

コッペリアの一節、幼い私も踊ったメロディーが思い出させた。背すじがピンとなり、指先も、つま先も、今にでも踊り出しそうになる。どんな時も真っすぐ前を向いて、舞台に上がることを夢みていた感覚が、私の心の中に蘇った。

もしかしたら、暗い灰色の世界をつくっていたのは、私自身だったのかもしれない。コロナ禍という状況は皆、同じはずなのに、私と違っていたのは、素直な心で前を向き踊る力強さ、それが輝きとなっているのだと気付いた。この

まではいられない、私にも上がれる舞台があるはず。自分を表現する方法は、いくらでもあるのだから。苦しかった思いが涙になりマスクを濡らした。マスクが冷たくなっているのに、涙は止まらなかった。私はその時、顔を上げ、前を向く決心をしたのだった。

その日から２カ月後、私は、中総体卓球個人戦の舞台に立っていた。もう弱い私ではない。コーチの指導を真っすぐ受け止め、笑顔で勝つと決めていた。そう、ここが私の舞台。

勝負の日を迎え、私は今までの道のりを振り返った。前を向いたあの日から、迷いを捨て練習を重ねてきた。ここであきらめたら、今日までの自分が報われない。４回戦、ここを勝ち抜けば、目指してきた県大会へ進めるのだ。大きく息を吸った。最後のサーブ、全身をこの一球へ託す……。それは、勝利の一球となった。その途端、張り詰めていた緊張の糸が緩み、周りの景色が色鮮やかに見えた。私は、やっと、自分が輝ける舞台を見つけたのだ。

バレエの舞台で輝いていた仲間たちが、前を向く力強さを教えてくれた。

「自分の舞台は、自分で見つける。そしてそこに上がっていこうとする力が大切なのだ。」と。

未来の私には、どんな舞台が待っているのだろう。中学生の自分が、悩んで過ごした冬の日のこと、バレエの客席で濡れたマスクの冷たさや、強く握りしめたラケットの感覚、そして、乗り越えた先に見えた景色を、私はきっと忘れないと思う。

今を懸命に生きることが、未来の私へできる応援なのだ。未来の私はきっと、また、新たな舞台に挑戦しているにちがいない。

自分らしい未来に繋がるように、今をしっかり歩んでいきたい。輝く「私の舞台」を思い描きながら……。